

おばけ雲

来栖良夫作 市川禎男絵



うばけ雲

来栖良夫作 市川禎男絵



新日本出版社

913.6 来 栖 良 夫

お ば け 雲

新日本出版社 1969

142 p 21cm (新日本こどもの文学)



検印省略

新日本こどもの文学 お ば け 雲

1969年9月30日 第1刷発行©

1978年3月10日 第4刷

著者 来栖良夫

画家 市川禎男

発行者 松宮龍起

発行所 株式会社 新日本出版社

郵便番号 112 東京都文京区大塚3-3-1

電話 (945) 8511 振替東京 3-13681

印刷 鎌倉印刷株式会社 製本 小高製本

(落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします)

まえがき

一九四五（昭和二十）年八月……。

そのころ、なにがおこっていたのでしょうか。日本の子どもや、おとなたちは、なにを
していたのでしょうか。していますか？

空は、あおくはれていました。白い雲をう
かべた夏の空でした。そこへ、高く、ちいさ
く、飛行機ひこうきがとんできました。

いったい、なにがおこるのでしょうか。

わたしは、ながい戦争せんそうのおわりの日へ、み
なさんを御案内ごあんないしたいとおもいます。

そこは、軍港ぐんこうのある海への町でした。

まえがき

一九四五（昭和二十）年八月……。

そのころ、なにがおこっていたのでしょうか。日本の子どもや、おとなたちは、なにを
していたのでしょうか。しっていますか？

空は、あおくはれていました。白い雲をう
かべた夏の空でした。そこへ、高く、ちいさ
く、飛行機がとんできました。

いったい、なにがおこるのでしょうか。

わたしは、ながい戦争のおわりの日へ、み
なさんを御案内したいとおもいます。

そこは、軍港のある海べの町でした。



10	おぼけ雲が空に……………	98
11	ピカドンがきた……………	108
12	お水ちょうだい……………	120
13	ヒマワリの花……………	131
	あとがき……………	140



作者紹介

著者 来栖良夫（くるす・よしお）一九一六年、茨城県稲敷郡生まれ。日本児童文学者協会理事。著書に『くろ助』（岩崎書店）『日本歴史物語集』（霞ヶ関書房）『おはなし日本歴史』（共著・岩崎書店）『太平洋戦争史』（共著・岩崎書店）『父が語る太平洋戦争』（共編・童心社）『白いチョゴリの学校』（草土文化）『私たちの作文』（筑摩書房）ほか。

画家 市川禎男（いちかわ・さだお）一九二一年東京生まれ。日本美術家連盟、児童出版美術家連盟、日本版画協会の各会員。戦前に児童劇団の装置・美術を手がける。著者に『子どもの舞台美術』（共著・さ・え・ら書房）。『ちびくろの出発』（新日本出版社）『われらの村がしずむ』（学研）『天使で大地はいっぱいだ』（講談社）など、多数の児童図書のさし絵・装丁を手がけている。

お
ば
け
雲



1 親なしっ子

おれが、

(腹^{はら}がへるのう)

とおもいながら、ノートもひろげないで、ぼんやりガラス窓^{まど}のほうへ顔^{かお}をむけていると、おねえちゃんが、せかせかとこっちへやってくるのがみえた。

おれの胸^{むね}が、ドッキンとおとをたて、それからドキドキとうごきだした。

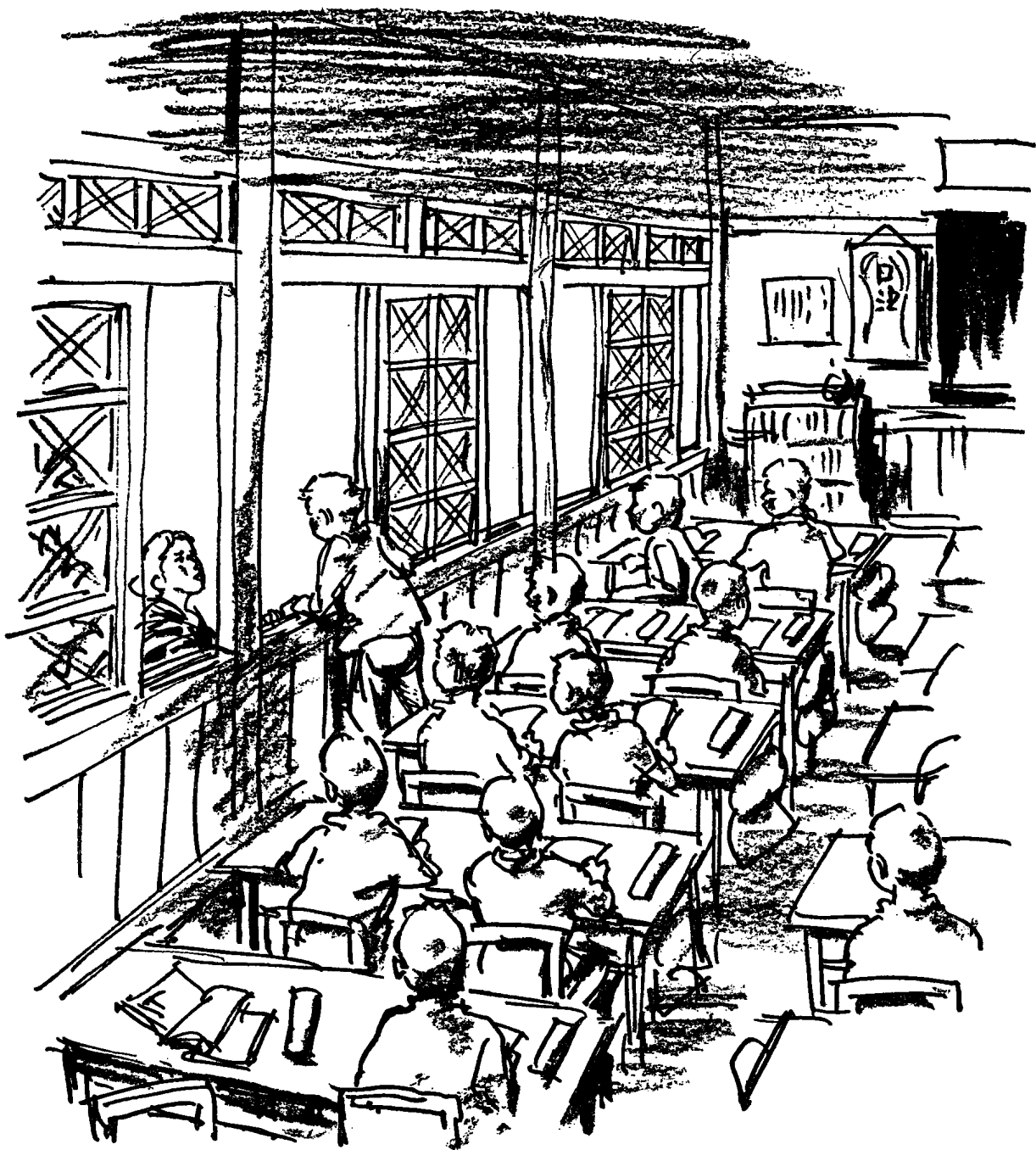
早川^{はやかわ}先生は黒板^{こくばん}にむかっていた。おれは、かまわず、窓ぎわへとんでいった。すると、おねえちゃんのあおい顔が、上をむいて、大きな目玉をとびださせていた。

「――鉄^{てつ}ちゃんといっしよに、すぐきんさい」

「うん！」

おれは、ぐつとあごをひいて、三年の教室^{きょうしつ}をとびだした。

――にいちさんは、よくアンニャン先生の罰^{ばつ}をうける。いつかも、五年の教室をのぞくと、ゆかの上にぎょうぎよくすわらされて、水のはいったバケツを、あたまの上でささえていた。



（みちよれ。いまにはじまるけん）

とおもっていると、にいちちゃんは、水のはいったバケツを、先生の足もとへほうりだした。

（やった！）

とおもって、目をあけたときは、もう教室の窓からとびおりるところだった。

このごろ、アンニャンは木剣をもつて授業をしている。海軍でも、教育がかりが、新兵をしこむときは、精神棒というカシの棒で、むやみとおしりをぶんなぐるそうである。そうして軍人精神をたたきこまれる水兵は、おしりがはれあがつて、便所へいってもかがむことができないで、ワンワン泣くそうだ。アンニャンは、海軍の教育がかりでもないのに、木剣で、子どもらをなぐって、釘でもうつように「やまとだまし」をたたきこんでいた。

おれが、いきおいよく五年の教室の戸をひっぱると、にいちちゃんは、やつぱり黒板のまえへひきだされていた。

「——そがなこつで、本土決戦になりよつたときに、にっこりわらって死ぬるか。

どうだ。覚悟ができちよるか」

にいちちゃんは、おしりでなく、脳天から「やまとだまし」をたたきこまれているところだった。おれら、死んだこともないのに、にっこりわらって死ぬるかどうか、わかりやしない。おれは、足をふんばって、

「おうい、鉄。なにをしちよる。かあちゃんが死んじやったのに！」

と、どなつてやった。

アンニャン先生と、五年生らは、ぽかんと口をあけたままだった。

(ざまあみい！)

おれらは、ろうかをかけた。そうして、はだして、校庭のつめたい砂のうえにとびだした。本も、ノートも、防空ずきんも、ほったらかしのままだった。

——かあちゃんを、墓場へうめてきた、さむい夜、アメリカの飛行機が爆弾をおとしていった。ウウウウ……と、サイレンがなり、

「空襲警報！ 空襲警報発令！」

と、警防団の人たちが、おもてをはしりまわったが、おれらは、死んだっていいとおもっていたから、防空壕へはにげこまなかった。まっくらい家の中で、おねえちゃんにしがみついて、

(これで、わしとにいちゃんは、親なしっ子になってしもうたけん)
とおもっていた。

とうちゃんは、おれらがまだ学校へはいらないころに死んだ。海軍工廠の工員をしていて、軍属を志願してラバウルへいったが、マラリヤになってしまった。それで家へもどってきたが、生きていたのは一週間であつた。ラバウルは、南太平洋にある、にぎやかな町だというだけで、ほかのことはなんにも知らない。

さらばラバウルよ またくるまでは

しばしわかれの なみだがにじむ

と、大きな声で流行歌をうたうだけだった。

それからは、かあちゃんが、海軍工廠の食堂の飯たきをしてはたらいた。

おねえちゃんは、ほんとうの「おねえちゃん」ではなかった。死んだかあちゃんの子である。おねえちゃんがうまれると、そのとうちゃんという人は、どこかへいつてしまつて、それっきりもどらない。海軍の水兵あがり、四国のなんとかという島のものだという。おれらがしているのは、警固屋の家には、おばちゃんと、おねえちゃんがいるということだけだった。

おばちゃんは、二年まえに病気で死ぬまで、よその着物をぬつた。戦争がひどくなつて、医者も出征してないし、薬はないし、おかねもないから、病気になるば死ぬよりほかないと、おねえちゃんはいつていた。

おねえちゃんは、小学校高等科をでたあと、ずっと海軍工廠の経理部へつとめていて、まだい子どもお嫁にいったことがない。

「こん夜は、どこらへんへ爆弾がおちよつたかのう。にいちゃん、腹がへるのう」
おれがいうと、

「こまつた人じゃねえ」

と、まっくらやみの中で、おねえちゃんがいった。

「腹がへったらのう、あしたのぶんまでくうたらええじゃないの。こんなときに、みじめだったらしいことをいうちゃいけん。あしたからは、ねえちゃんが親がわりになつてのう、おまえたちふたりをたべさせるけんのう。ひぼしにはしないけん。心配しんさんな」

いまは、だれも米や麦はたべられなかった。砂糖や、塩や、しょう油もめつたに手にはいらなかった。ジャガイモ、アワ、コウリヤン、カボチャ、ダイコン、トウモロコシ、マメカス——そんなものが配給になるだけだった。こういう代用食でも、腹いっぱいいたべるほどはなかったから、しょっちゅう腹がへっていた。それでも葬式でからといって、とくべつに米とおし麦の配給がもらえたのである。かあちゃんが死んでしまつて、なみだがでるけれど、米と麦の飯がたべられたのはうれしかった。おれたちは、きょうのぶんをたべて、のこりを、おにぎりにして、しまつておいた。

おねえちゃんが電灯をつけた。電灯には、くろいおおいがかぶさつていて、家の中のあかりがそとへもれないようにしてある。空襲警報になったとき、すこしでもあかりがもれると、アメリカ軍の飛行機の爆撃目標になるといふので、おもてから、

「米英撃滅、電力節約、むだな電気はけししましょう」

とどなれる。

おねえちゃんが、おさらへおにぎりをのせてもつてきた。さらさらした塩が、舌のさきでとけて、口の中いっぱいにひろがつた。おれもひとつ、にいちゃんもひとつ、

おねえちゃんは、たばたくないといった。

茶^{ちや}ぶだいや、ひざのうえへ、飯^{めし}つぶがおちると、おれらはすばやくひろった。

「なんじやい。わしのこぼした飯^{めし}じゃけん」

「にいちやんだって、いまさっき、わしのこぼしたのを、ひろうたじゃないか」

「なんじゃ、このどろぼう！」

「おまえかつて、どろぼうじゃけん」

「ばかたれ！」

おれらは、かみついたり、ひっかかれたりした。

おねえちゃんは、電^{でん}灯^{とう}をけして、ふとんへもぐった。まっくらやみでは、けんかもつごうがわるいので、おれらは、ゆびをなめたり、てさぐりで、ひざのあたりのこぼれた飯^{めし}つぶをさがしたりしてから、ふたりがひとつふとんへもぐった。

「——おい、洋^{やう}ちゃん」

と、にいちやんがいった。

「なにい。わしの名まえはのう、洋^{やう}二^にじゃけんど、小^こ鉄^{てつ}といいんさい。みんなにそういうて、宣^{せん}伝^{でん}をしとるんじゃけんのう」

「そうか。そんなら小鉄」

「なんじゃ。なんか用か、にいちやん」

「うん、なんでもないけん」



そういつてから、おれの耳^{みみ}のところへ口をもつてきて、

「わしらが、おねえちゃんの子どもになったら、おねえちゃん、お嫁^{よめ}にいけんようになるのう」

といった。

おれは、へんじのしようがないので、だまっていた。

すると、にいちゃんが、大きな声でいった。

「あした、おきても、わしのこぼした飯^{めし}つぶはひろうな。わしのもんへ、手をだしちやいけんど」

「なにいうん。にいちゃんこそ、わしのへ手をだしちやいけんど。わしは、ちやあんとかぞえてあるけん」

「こらあ、でたらめいうちよって」

「でたらめなもんか」

すると、大きな手がのびてきて、びしっ、びしっと、おれとにいちゃんの顔^{かほ}をひっぱたいていった。

（いてて……）

おれらは、鼻^{はな}をすすって、おとなしくして、

（あしたの朝ごころは、また腹^{はら}がへるじやろうのう）
とおもった。